

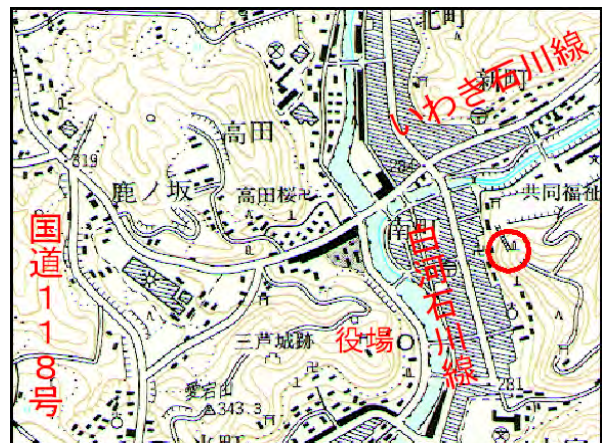
石川町資源調査調書

通し番号	82	整理番号	7	-	006	作成	平成19年2月
名 称	セキヨウシャキネンヒ 石陽社記念碑					項 目	石造・記念碑
管 理	住 所	石川町字南町地内					
	連 絡 先						
	管理者及び所有者	石川町					
	東北最初の政治結社「石陽社」が石川町に設立されたのは明治8年8月16日のことである。当時石川区長をしていた河野広中が吉田光一ら、町の有志に呼びかけて結成した。石川郡外からも参加した者がかなりあり、間もなく県内には石陽社に刺激されて、三師社・愛身社・北辰社・興風社が相次いで誕生することになった。 石陽社社長に推された河野広中は、当時27歳。石陽社はのちに「石陽館」という学塾を設けて、青年に自由民権の思想・学科を教授していたらしい。その学習内容は、歴史・法律・経済・文明史である。ここは、16・17歳の青年が集まり政談演説会の弁士として、活躍するようになった。 石陽社の最終加盟者は209名にも達した。河野が石川町を去った後は、神官の吉田光一が中心になった。 石川町を一望に見下ろすことのできる「石尊山」（せきそんやま）には、設立百年を記念して記念碑が建立されている。						
参考文献	ビジュアル石川町の歴史～石川町史別巻～ 石川町ホームページ http://www.town.ishikawa.fukushima.jp						
関連項目	河野広中（8－003）鈴木重謙（8－004）吉田光一（8－005） 石尊山公園（10－009）						
備 考							

写真及び位置図等



全 景



位置図

石川町資源調査調書

通し番号	83	整理番号	7	-	007	作成	平成19年2月																
名 称	バヤシ ワヘイ 小林 和平				項 目	石造・記念碑																	
管 理	住 所	石川町大字沢井字小金石																					
	連 絡 先																						
	管理者及び所有者																						
概 要	小林和平は明治14年(1881年)生まれた。昭和41年(1966年)3月8日行年86歳で生涯を閉じた。石川町を代表する石工である。 和平は明治25年(1892年)頃12、3歳で現在の浅川町大字福貴作に住む石工小松寅吉布孝に弟子入りした。その頃の寅吉は、石の彫刻では近郷周辺に名工として知られた石工であった。和平は師寅吉のもとで厳しい修業を重ねるうち才能を発揮し、名実ともに一番弟子として寅吉の片腕となった。後年孫の和喜に、師匠の寅吉を尊敬するとともに、その一番弟子であることが自分の誇りだと話していたという。 明治42年沢井字小金石に居を構え独立した。独立後も師寅吉とは一緒に仕事をし、この地方は勿論栃木県那須町の方まで作品を残している。和平は特に狛犬の彫刻を得意とし、昭和5年に石都々古和気神社、6年に須賀川の保土原神社、7年に古殿の古殿八幡神社、8年に中島村羽黒神社、9年に棚倉町一色の鐘鐺神社と立て続けに彫刻している。 主な作品 <table><tr><td>石の社</td><td>: 石川町沢井八幡神社</td><td>五重塔</td><td>: 石都々古和気神社</td></tr><tr><td>仁王像一対</td><td>: 石川町沢井長福院</td><td>狛犬一対</td><td>: 石都々古和気神社</td></tr><tr><td>不動明王像</td><td>: 石川町沢井</td><td></td><td></td></tr><tr><td>恵比寿、大黒像</td><td>: 石川町沢井</td><td></td><td></td></tr></table>							石の社	: 石川町沢井八幡神社	五重塔	: 石都々古和気神社	仁王像一対	: 石川町沢井長福院	狛犬一対	: 石都々古和気神社	不動明王像	: 石川町沢井			恵比寿、大黒像	: 石川町沢井		
石の社	: 石川町沢井八幡神社	五重塔	: 石都々古和気神社																				
仁王像一対	: 石川町沢井長福院	狛犬一対	: 石都々古和気神社																				
不動明王像	: 石川町沢井																						
恵比寿、大黒像	: 石川町沢井																						
参考文献	ビジュアル石川町の歴史～石川町史別巻～ 石川町史第6巻 各論編1																						
関連項目	石都々古和気神社(4-001) 王子八幡神社(4-005) 長福院(3-011) 八幡神社(沢井)(4-006)																						
備 考	1881年生～1966年没																						

写真及び位置図等



石の社 八幡神社(沢井)



狛犬 石都々古和気神社参道



狛犬 王子八幡神社



石川町資源調査調書

通し番号	84	整理番号	7	-	008	作成	平成19年3月
名 称	ギキョウノヒ 義狭之碑					項 目	石造・記念碑
管 理	住 所	石川町字大字中田字中塚309					
	連 絡 先	TEL 0247-57-2180					
	管理者及び所有者	観照寺					
	瀬谷市右衛門は中田字上矢造の庄屋であった。時の泉藩は藩財政立て直しの策として領民に開墾を勧め、その実績に応じて奨励金を出した。ここ上中田地区においても人々は争って低湿地を開墾した。一応開拓の終わった所へ藩から役人が来て検地を行った。その結果明る年の租税は一挙に900石の上納割当てとなった。冷水を引き、山間を耕して畑とした上中田にとっては到底背負い切れない重荷である。藩主本多公に対し上納軽減を訴えることとなった。強訴の理由が正当でないと認められた時は、上訴の代表者は打首の刑に処せられる事になっていた。上中田の庄屋数人は結局当時の代官柘植伝兵衛にその旨申し上げた。市右衛門の熱烈たる願いに負けてか代官はついに上訴を許すこととなった。そこで後日藩から役人が来て再検地ということになった。そこでの難渋の実情を知っていた柘植代官は測縄の間(6尺)を6尺3寸に作り、また畔幅はすべて3尺とする方法で測量を実施したところ、前年の検地面積どころか却って減反の結果となった。あとで代官の計略を聞かされ、ただ涙有るのみだったという。その結果税金も割当ての三分の二に減らされた。 後になってこの検地帳記録により下矢造、山桑、棒良の山林300余ヘクタールを中田部落入合地(共有財産)として無償で交付される結果となった。 さて代官柘植伝兵衛はその後偽りの検地であったことが発覚し、伝兵衛が先ず藩主から呼び出しとなった。伝兵衛は覚悟を決め、小塚原の某寺で自分の戒名をもらい、その戒名を飛脚に						
参考文献	中谷地区民俗資料資料 石造文化						
関連項目	観照寺(3-002)						
備 考							
写真及び位置図等							
 全 景		 位置図					

石川町資源調査調書

通し番号	85	整理番号	7	-	009	作成	平成19年3月
名 称	ダイキョウセモリミキオケンショウト 大教正三森幹雄顕彰碑					項 目	石造・記念碑
管 理	住 所	石川町大字双里字本宮地内					
	連 絡 先						
	管理者及び所有者						
	石川町形見出身の俳人。 26歳の時江戸に上り、惺庵西馬に入門して俳諧を学ぶ。そして春秋庵をついで芭蕉翁第九世の伝統を受けた。この時静波から幹雄と号をあらためている。31歳で京橋丸太新道に庵を結び、潜窓と号して俳人として世に出た。別号に不去庵、香楠居、桐子園、春秋庵、天寿老人などあり、また三木雄とも名乗った。著書は多く、『玉川紀行』『再遊記』『俳諧自在法』『俳諧名譽談』などがあり、『俳諧明倫雑誌』を没するまで三〇年にわたって刊行した。 石川町双里に句碑がある。俳画もよくし、好んで亀を描き、天覧に浴したことがあるという。明治時代の旧派を代表する俳人であった。 ひややかな水踏あてぬ草紅葉 窓一つ持ても月のあるじかな 時雨にも玉巻そむる芭蕉かな 今日ははや山にかぶさる桜かな 春秋の草木に習う翁かな 大正7年4月に有志により、大教正三森幹雄顕彰碑が白坂下の桜の下に建設された。顕彰碑には「今日磐 波耶 山耳 加布佐累 桜閑那 三木雄」と記されている。 (きょうははや やまにかぶさる さくらかな)						
参考文献	中谷地区民俗資料資料 石造文化						
関連項目	三森幹雄(8-011) 白坂下の桜(1-003)						
備 考							
写真及び位置図等							
 全景		 位置図					

石川町資源調査調書

通し番号	86	整理番号	7	-	010	作成	平成19年3月
名 称	オオタケカメゾウセンセイケンショウ 大竹亀蔵先生顕彰碑					項 目	石造・記念碑
管 理	住 所	石川町大字双里字七鍬石地内					
	連 絡 先						
	管理者及び所有者	石川町					
	大竹亀蔵は日本の炭焼史に残る炭焼きの名人である。彼の製炭技術は、近代日本製炭技術の基礎を築いた。 田中長嶺や榑崎窯を開発した榑崎桂三及び、八名窯を開発した織田源松等到大竹は師事され、後に大竹窯を考案した人である。 大正9年、大日本山林会が東京大学清澄演習林で第1回全国大会の炭窯性能試験を行ったとき、テストの結果全国から5基の炭窯が選定され、そのひとつに大竹窯が選ばれた。この窯は優秀であり、炭化技術も最上級と実証されている。このテストに残った窯は、大竹窯のほかに大正窯、長野窯、英窯、八名窯であり、これらは、当時、日本の代表的炭窯であった。山林会の炭窯性能試験は後、大正15年、昭和9年、昭和18年と10年ごとに行われた。木炭は、当時、年間200万トンに達し、(現在は、37,000トン)自動車燃料にも大量に使用された。大竹さんは、大正14年から昭和19年まで20年間福島県の製炭技師として勤務され、大竹窯は全国に普及したが、特に、福島県がその主力で大竹窯が多い。また、岩手県は、榑崎窯、島根県は、島根八名窯であり、日本の黒炭の生産量の過半数は、これらの窯で生産されたものである。 昭和19年に門人により双里七鍬石地内に大竹亀蔵先生顕彰碑「木炭報告」が建立された。						
参考文献	中谷地区民俗資料資料 石造文化						
関連項目							
備 考							
写真及び位置図等							
 全 景		 位置図					